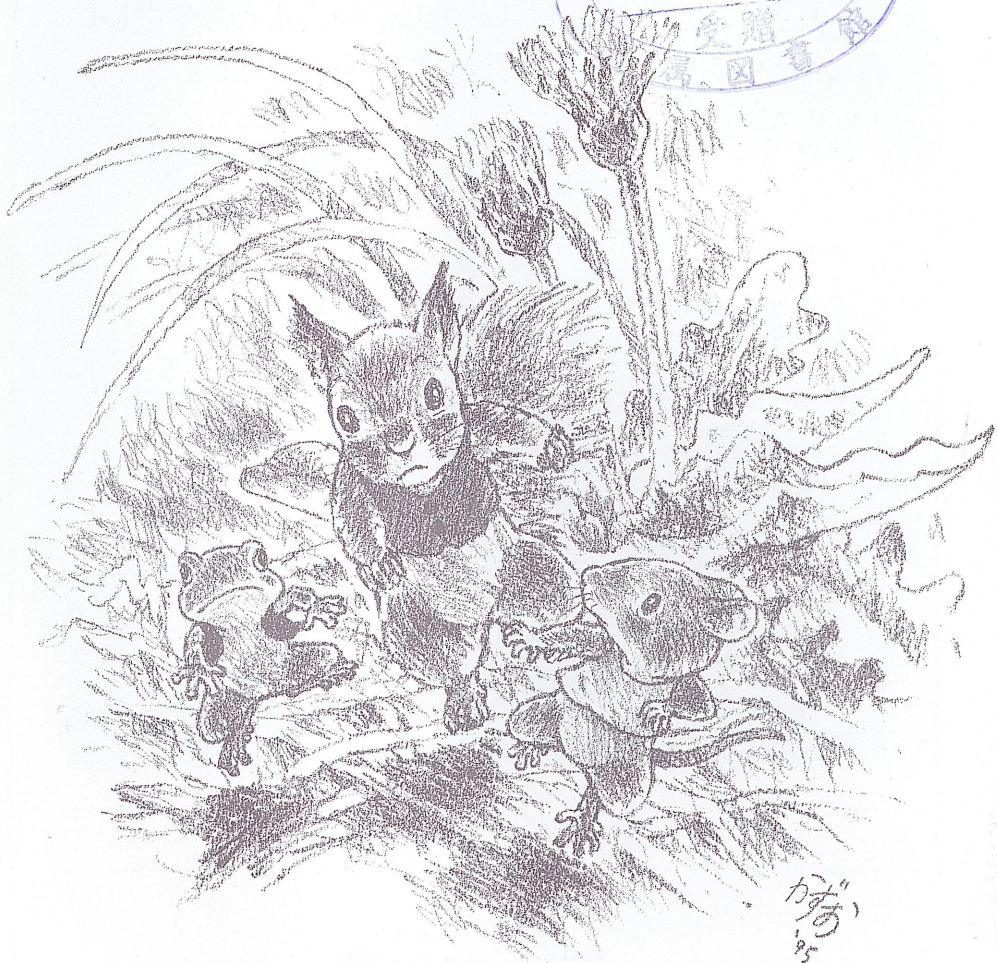


# 幼児の教育

'96  
12月号

家庭—保育所—幼稚園



# 子どもの心とまなざしで

— 倉橋惣三絵本エッセイ —

倉橋惣三がキンダーブックに寄せた解説をまとめた一冊。子どもをあたかなまなざしで見つめた彼の姿がよくわかると共に、私たちに子どもの心理とものの見方をていねいに教えてくれる。リズムカルで詩のようなやさしい語り口が心地よく、プレゼントにも最適である。



新刊

倉橋惣三 著  
解説/本田和子

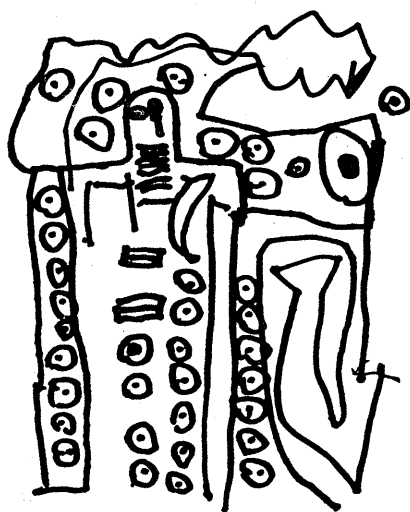


B 6 変型判・定価1,200円(本体1,165円)

キンダーブックの  
フレーベル館

# 幼児の教育

第95巻 第12号



# 幼児の教育 目次

## ——第九十五卷 第十二号——

© 1996  
日本幼稚園協会

ある日……………(4)

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(9)

自分の思いをもって、ゆっくり出会う……………藤野 敬子…(6)

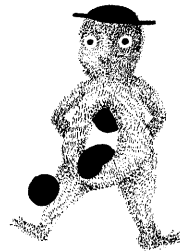
震災後の子どもたち(12) ママと暮らせばいいのに……………鹿島 和夫…(10)

保育する“私”を見つめる 〈いきいきしさ〉を保つために…嶺村 法子…(16)

米国の生活四十五年間の変化(1)  
—障害をもつ人は社会の片隅の存在ではない!……………津守 真…(24)

トポスにおける発達 第十一回

幼稚園のコーナーという場所……………無藤 隆…(31)



子どもたちへのまなざし(21) 今を生きる……………松井 とし… (40)

保育の窓(5) 教育実習を考える……………原口 純子… (42)

子どもの本から 大きな足の女の子の英雄……………皆川美恵子… (50)

外国の文献から 『心情と知性の教育―日本の就学前と小学校教育に関する考察』

第五章 自律の原点……………古賀 松香… (54)

ある日の育児日記から(72)……………佐藤 和代… (60)

第九十五巻総目録…………… (61)

表紙絵・いわむらかずお「なにかありそうだ」

扉題字・津守 真

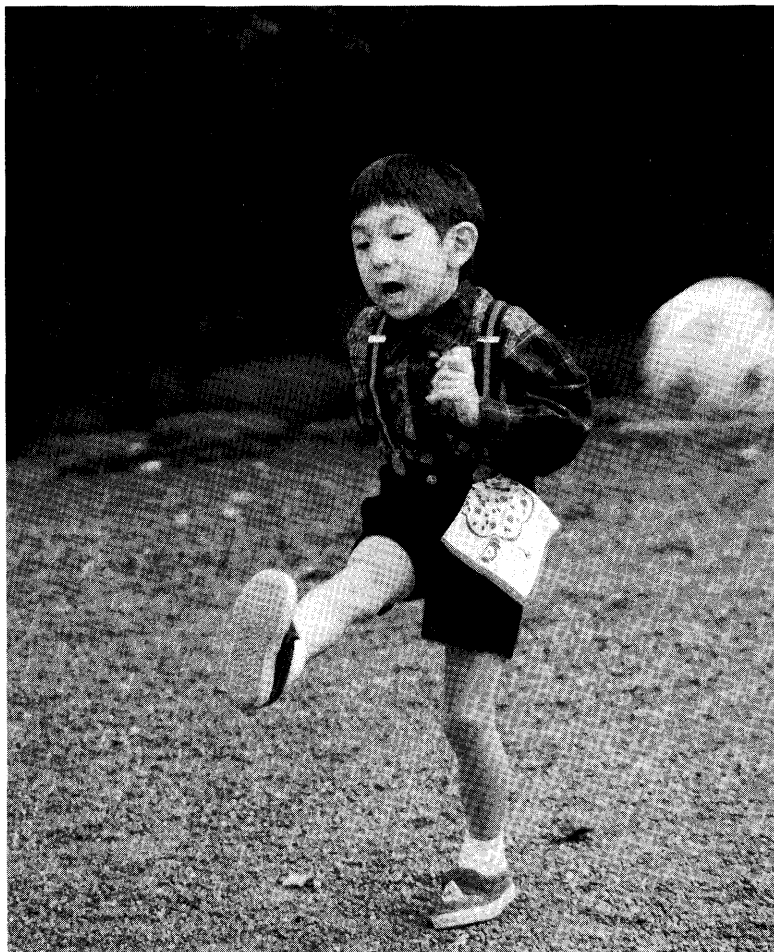
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・彌永たたえ「黒ダイヤ」

編集委員・田代 和美／伊集院理子・高橋 陽子

編集部・仲 明子





ある日

撮影・平野 清



## 自分の思いをもって、

## ゆっくり出会う

藤野 敬子

二十一世紀は、豊かな自然、家族や地域との温かいつながりなど今世紀に失ったもの大切さが見直されるのではと期待しているが、今の便利な生活様式を全部手放すことはいと思われる。書く人の思いのじむ筆跡よりもワープロ、鉛筆を削りながら計算するよりは電子計算機といったことが、ますます多くなっていくのではないだろうか。そんな中に生きる幼児には、自分の思いをもって人やものにゆったりと出会って欲しいと思う。

五歳児八人ほどがサッカーをしている場面を都内の幼稚園で見たことがある。小学三年



生の兄の影響でルールに詳しい子どもがリーダー格で、相手チームにまで大声で指図しながら遊んでいた。その群の中に、何か言われてから、やっと動き出す子どもがいて、「サッカー止めて、花一匁やろうよ」と何度か声をかけていたが、やっと提案が受け入れられて全員が花一匁を始めた。すると同じ顔ぶれなのに一転して、どの子どもの表情も声も動きもまるで穏やかなものに変わったのである。何回も繰り返され、時折、ふざけた即興のせりふが飛び出して、のどかな笑い声と歌声が流れていった。皆がよく知っている素朴なルール、相手方の誰を選ぶか、それぞれの思いをもって頭を寄せあう相談、偶然性の多いジャンケンで勝負が決まる花一匁が、背伸びして覚えるルール、頭の回転や敏しよさが要求されるサッカーの疲れを解きほぐしているようであった。

この場合は、たまたまルールに詳しい子どもがいたからで、サッカーと言っても幼児は互いにボールのけり合いを楽しむことが多い。逆に花一匁が、リーダーの意のままに操られて、おもしろくないこともある。要は、自分の思いをもって遊んでいるかどうかだろうと思うが、サッカー以外にもテレビゲームなどテンポの速いものが増えている。この勢いで二十一世紀も進むとしたら、幼児には、自分のテンポでゆっくり出会う時間や空間が、まず必要ではないだろうか。

同様のことが大学生にも言える。授業中ビデオを見ながら、つい居眠りしてしまう学生がいる。写真を見せる時も、人数の多いクラスでは、順々に手渡しながら見ると時間がかかるので、機械を通して大映しにしていたら、「時々、映像を消して先生が顔を見せてく

ださい。でないと思つてしまふ」と頼みにきた学生がいた。そこで、一五〇枚ほどの写真を前列、後列、左右の壁ぎわの机の上に並べ、部屋を一巡しながら見るように置いてみた。全員が一度に席を立て、どこからでも見始め、一周すると着席する。追いついてもいいし、今しがた聞いた話を思い浮かべ話し合いながら見てもいいことにしたので、自分の好きなテンポで見られるし、居眠りするひまもない。前回、眠ってしまったと後悔していた学生が、床にどっかりと腰を下ろして一枚の写真を手にとつて、しげしげと眺めている姿も見られた。また、写真を並べる時は、机の上の学生のノートなどを片寄せてもらつたりするので、ひとこと、ふたこと話しかけたりもする。最後列の学生にも写真の説明などができて、あとから、そのことで珍しく質問にきたりなど、思いがけず個人的な出会いが生まれ、予想外の楽しい時がもてたのである。

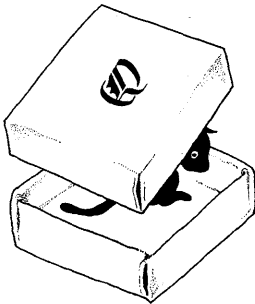
授業という形は、十九世紀末に始まって二十世紀が花ざかりであつたが、教育はもともと個人的な出会いが基本である。今のままではそれぞれの思いが、充分、出にくいのではないだろうか。例えば、学生にキャンパスをどこでもいいから歩いてレポートを書くように言うと、そんな漠然とした課題ではなくて、視点を示してほしいと言われたこともある。そういう学生は、ビデオを見て思わず笑い声が起こるような場面でも、まじめに見ていて笑わない。ビデオから何を讀みとることが要求されているのだからと考え込んでいる様子である。「同じキャンパスを歩いて、その人によって見るもの聞くもの感じるものが違う。自分は何にどのように出会うか、見つけてほしい」と説明すると納得する。相手

の意向をしつかり汲みとりながら学ぶ習慣が身につけてしまっているように思える。

それが実は幼児にも及んでいて、保育中、いつも大人や友達の意味ばかり気にしている子どもを見かけることがある。思わず我を忘れ、まわりを忘れて、目の前のものに心を奪われて遊びこむひとときが少ないのである。「この子は、張り切りすぎて、行事の前にも疲れて一回は休みます」などという話をきかされた。めあてに向って、がんばるばかりでなくて、まず、ゆったりと心を遊ばせたいと思う。

二十一世紀は、人口問題、生きものや異文化の人々との共生、未然に防げない災害、紛争など問題が山積している。どれも命令や強制ではなくて、各自が自覚をもって丁寧に対処することが望まれている。幼い時に焦らずにその素地を育てていけたらと願っている。

(東洋英和女学院大学短期大学部)



震災後の子どもたち(12)

# ママと暮らせばいいのだ

鹿島 和夫



わたしのクラスには、まだ六歳とか七歳だとい  
うのに、さまざまな人生の辛苦を味わっている子  
どもが少なからずいます。

そんななかで、最近、増えてきたのは、両親が  
離婚したために、父子家庭、または、母子家庭と  
なって育てられている子どもたちです。

以前には、両親が離婚をして、お母さんに育て

られているとか、お父さんに育てられているとか  
という子どもは、教室にいても、なぜか、言動に  
暗さが見られて、人見知りをしたり、ひとりぼっ  
ちで過ごしたり、おしゃべりもしないという様子  
がよく見られるものでした。

でも、最近の子どもの様子を見ると、ほとん  
どの子どもたちは、そんな暗さや影は、微塵も見

せなくて、みんなといっしょに遊んでいても、異質なものはまったく感じられない子どもが多くなつたように思います。少なくとも、どの子どもたちも経済的には恵まれていて、風采に貧乏つたらしい感じがなくなっているからかもしれません。

二年生の浅井優恵ちゃんは、そんな子どもの一人でした。最初の頃、わたしは、まったく父子家庭で育てられている子どもだとは思ってもみませんでした。

いつもにこにことしていて、だれとでも仲良く付き合ひ、だれからも好かれる。仕事もてきぱきとやりこなし、学力も良好だからです。

ところが、あるとき、優恵ちゃんは、つぎのような作品を書いてきたのです。

うまれたとき

2年 あさいゆきえ

わたしがうまれたとき

ベットのうえでねていました

パパとママのひざにだっこをしてもらって

しゃしんをとってもらいました

わたしがふとんの上になねころがって

わらっているところもとってもらいました

おめんをかぶっているところも

とってもらいました

いっぱいわらっているところを

とってもらいました

パパもママもしあわせになるとおもって

いつもわらっていました

だけどパパとママはりんこんしました

最後の一行で、私は絶句してしまつたのです。

さりげなく書かれているけれども、わたしにとつては、思ってもみなかった事実だったからです。

そして、急に、優恵ちゃんのお母さんは、どうしているのだろうかと興味を抱くようになったの

です。

個人懇談会の時、お父さんに単刀直入に尋ねてみたのです。

「お父さんは、お母さんと離婚されたのですね」

「ええ、そうですよ」

「戸籍も抜かれていますのですか」

「きちんと抜いています」

「どうして、別れたのですか？」

おとうさんは、五分刈りの頭に手をやって、遅い体をすくめながら、恥ずかしげに伝えてくれました。

「いやあ、愛情がなくなったのです」

「えっ、それだけが理由ですか」

「そうです。それで、向こうが出ていったのです」

「子どもが可哀そうだとか、子どものために辛抱するとか、思わなかったのですか？」

わたしは、つまらないことを聞いてしまいました。また。まるで、芸能レポーターのようです。

「いいえ、なにも思わなかったです。しょうがないことやと思いましたから」

こんな話を聞くと、わたしは、余計なことを考えてしまうのです。この夫婦の愛を蘇らせることができないものだろうか。

というのは、優貴恵ちゃんが、ママといっしょに住みたいということを書いていたことを覚えていたのですから。

あるとき、優貴恵ちゃんは、みんなでお母さんに会いにいったのです。そのときのことを、「あのねちょう」に書いてきてくれました。

ママのいえ

2年 あさいゆきえ

きょうのばん3人で

ママのいえにいったとまりました

おふろにもはいました

ママのへやはひとつしかないけど

へやのかぎはカードになっています

ねるときはゆきえとひでみが

ママのベットにねて

ママとパパはカーペットで

ふとんをひいてねました

わたしは、こんな様子を読むと、仲むつまじい

夫婦の生活を想像してしまいます。

別れた妻の部屋へ、親子で遊びにいっている。

そして、同じ部屋で夜を過ごしている。こんなことが  
できるのは、やはり、愛があるからではない  
でしょうか。

わたしは、また、余計な事を想像し、そして、  
けしかけてしまうのです。

「お父さん、復縁されたらどうですか。優貴恵  
ちゃんが、一番、喜ぶことだと思いますがね」

お父さんは、苦笑いしながら、「いやいや、そ  
んなこと考えたことないです」と答えたのです。

最近の若い人たちの思想や生き方について不可  
解なことがあります。このお父さんの行動もそ  
のひとつとなりましょう。

本当に、夫婦の絆って不可思議なものなんだ。

わたしは、優貴恵ちゃんの明るさと、お父さんの  
てらいのない態度を見ると、つくづくと感じ  
るのです。

一九九五年一月十七日の早朝、阪神地区に大地  
震が起こりました。浅井一家も、大きな被害を受  
けたことはいまでもありません。

地震の時、鉄筋住宅の七階は、倒れなかったの  
ですが、部屋の中は、ぐしゃぐしゃになってしま  
いました。サイドボードやテレビ、それに食器  
棚、本箱などが、体の上に被ってしまいました。  
幸いにして怪我はなかったので、親子三人は、雑  
具の山をそろりそろりと外へ脱出したのです。

最初、小学校の教室へ避難したのです。

しばらく、そこで、お父さんと妹と三人で過ごしていました。救援物資を貰って食事をして、仮設に設けられたシャワーで体を洗い、仮設トイレで用を達するという生活が続きました。

そんな不自由な生活を聞きつけたお母さんは、三人を自分の狭い家と呼んだのでした。

お母さんは、大阪城近くのマンションに住んでいましたから、震災の被害はありません。部屋は、一つしかない狭い場所でしたけれども、再び、親子四人での生活が始まったのです。

久し振りに味わうお母さんの手料理は、優貴恵ちゃんを狂喜させました。おいしいし、お父さんが作ってくれる料理とは、ひと味違ったものを出してくれるのですから。

それに、カラオケに行ったり、公園へ遊びに行ったり、それにスキーにも行ったりしました。

このようなお母さんと暮らす生活は、優貴恵ちゃんにとって、とつても幸せなことでした。こ

のまま、お母さんと一緒に暮らせるといいのにとずっと思っていました。

わたしに伝えてくれた「あのねちよう」には、お母さんの楽しい語らいや思い出がいっぱい書かれていました。

わたし自身も、このまま、お母さんと暮らせるようになったらいいのとさえ思っていました。

震災で不幸になったけど、そのことで、お母さんとお父さんの愛が復元する。これは、不幸中の幸いではないか。

ところが、お父さんは、もとの家で住めるようになったから、家に帰るといいでしたのです。

そして、一か月程生活をして、三人は、家に帰ってきたのです。

おわかれ

2年 あさいゆきえ

ママのいえからかえってきました



ママはもっとおりといたけれど

パパはかえるといっつききません

かえってからごはんをたべました

そしてテレビをみていると

さびしくなっくなみだがでてきました

ママ さようなら

せつかくの機会だったのに、やはり、お父さんは、復縁することをしませんでした。

わたしに「しょうないですわ」と笑いながらいってくれたのですが、複雑で微妙な夫婦心理というものを感じないではいられませんでした。

夫婦の絆というものと親子の情感というものは、別のものなのでしょうか。情感があるからといって、夫婦の絆が堅く結ばれているということではないようです。

わたしは、昔気質な人間ですから、浅井夫婦のような間柄は、理解できないのですが、優貴恵

ちゃんのような子どものほうが、むしろ、よく理解できるのではないのでしょうか。

いまでもにこにここと屈託のない笑顔をみせて、友だちと仲良く遊んでいる優貴恵ちゃんを見てみると、震災がチャンスだったのになあと思ったりたしの夫婦というものの概念が古臭くて、いまでは通用しない考えなんだということを明確にさせられたような気がします。

優貴恵ちゃんは、そんな両親を見てきますから、新しい夫婦像をつくりあげるナウイ女の子に成長すると思います。

(元市立神戸湊小学校教諭)

# 保育する“私”を見つめる

〈いきいきしさを保つために

嶺村 法子

## 三年保育四歳児

——四月三十日の記録より

「先生、ケンジくんが土出してる……」という声を

聞く。見ると、ケンジは園庭に出る階段の途中に腰掛けて花壇の隅を掘っているところで、その土が外にこぼれている。私は「ケンジくん、お靴見てごらん。その靴でお部屋に入ると泥だらけになっちゃう

よ。他のお友だちもそれ踏むと汚くなっちゃうから、土を外に出すのはやめようね」と声をかける。

その時のパチッと見上げた目……。

ケンジはその前の週、プランターの後ろのダンゴムシを熱心に探していた。この日も虫探しのつもりがどんどん穴掘りになって、スコップから土がこぼれ落ちたのだろうと思う。こんな風に一方的に注意

をする前に、ケンジが何をしようと思っっているか聞いていれば……。私は、ケンジのことを考えてというより、ケンジのことを言いに来た女兒に対して、その子の納得のいくような対応をしていたのではないかと反省する。

ケンジは一言も弁解しなかった。私が一方的にしやべったから言ってもしょうがないと諦めてしまったのか……。無言で私を見上げて何か言いたそうなの目忘れられない。

ケンジは、その後もそこに座って土いじりをしていた。

私はというと、一方的に注意した後、部屋でこのぼり作りにかかわっていた。このぼりに限らず製作するものがあると、どうしてもそちらの方に目が向いてしまい手が取られてしまうということがあるけれど、でも、気持ちさえあればケンジに対してもっと別のかかわり方ができただろう。

この後O先生がきて、ケンジに「一緒に砂場に行こう」と声をかける。何人かがその声を聞いてついで行くが、ケンジは行かない。私も「お砂場に行ってきたもいいよ」と言ってみるが「行かない」という。

ケンジは砂遊びがしたかったのでなくて、やっぱり虫探しがしたかったんだろうと思う。私が「こっちの方にダンゴムシがいるかな?」と、プラントーを移動するなどして別の場所を示してあげば、虫探しに熱中できたかもしれない。でも、ケンジが春の陽差しの中でのもんびりと行なっていた行為そのものを否定しなくてよかったと思う。土を外に出さないようにという注文は付けたけれど……。

この時のケンジの姿を思い起こしながら、私はレオレオーニ描くところのネズミのフレデリックを思い出した。子どもにとっても大人にとっても、た

だぼんやりと過ごす時間というの必要だろうと思う。しかし、そのぼんやりが、何もすることがなくてそうしているのか、何もしていないように見えるけれども、その子にとっては意味があることなのかを見極めることは難しい。

しかも、その後ケンジが砂場に行かずに何を遊んだのか、記憶がない。そこが私の甘いところだと自分でも思う。最後まで見届けていない。

それともうひとつ。

「こうしたらどうだろう」と私の考えを示せば、ケンジも「そうじゃなくてこうしたい」とか「いいよ」とか、自分の気持ちを表現したのだろう。この時もO先生の誘いに「行かない」と意思表示しているのだから。そういう私からの働きかけが足りないのだからと思う。

子どもがやっていることを否定せずに認めるといふこと、そのおもしろさ、楽しさに共感するといふこと、私の思いや考えを伝えるということ——こう

いう時は見守って、こういう時は一緒に楽しんで、こういう時はもっと楽しくなるようにアイデアを出したり、場所や物を一緒に作ったり——ということが、自分の中でも明確になっていないなあ、もやもやしているなあ、と思う。その子が何を楽しんでいるのか、何をしたいと思っているのか、もっとじっくり見て感じとる目を養わなくては、と思う。

### 明日の保育に向けて

共に生活する大人として、その子のために、その子と一緒に“私”は何をしたのか、もっと自分の思いを表現し、伝えていこうと思う。子どもには、やりたくないことは「やりたくない」と表現できる力があることを信じて。

### 私が変わったことでケンジも変わった

——五月三十日の記録より

ケンジがジョイントマットをつなげてどんどん広

げていく。「先生見て」と言うので、「わあ広いおうちになったね」と応える。

その後、ケンジはタカオと二人でウルトラマンのテープをかけ、ポーズを取り合っている。私が、廊下の歯医者さんで積み木のベッドに横たわり治療を受けている様子を、二人が交替で興味深そうに見にくる。「二人は私と遊びたいのかな」と思う。

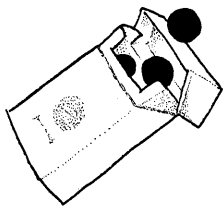
ケンジ、タカオの二人は、折り紙を持ってきて丸めて、Bブロックをつなげた電車の上に乗せている。「あれっ、何が乗ってるんだらう?」と声を掛けると、ケンジが「おにぎり。お寿司作ってるの」と言う。

部屋では朝からテープルでのり巻き作りをしており、ケンジはそこには来なかったが興味を持っていたことがわかる。「私も一緒に作らう」と思い、材料（紙と糊）を二人のところに運び、作り始める。ケンジが「これエビなの」と赤い色紙を折ってシツポをねじった物を指差す。私は「じゃあ御飯もあつ

たほうがいいね」と紙を丸めエビを上に乗せ、両面テープでとめる。ケンジと一緒にもうひとつ作る。

ケンジは「僕、納豆巻き好きなの」などしゃべりながら作る。「ケンジくんて納豆巻き好きなの? おいしいよね」と応えながら、ケンジが自分の好みについて、こんな風に自分から私に話しかけてきたことがあったらどうか、とうれしくなる。私がかごを用意し「ここにいれておく?」と言うと、作ったお寿司をその中に並べ、ケンジは「ここに冷やしてあるの」とままごとの白い棚にいれる。

他の子に呼ばれ私とその場を離れた間に、二人は外に行ったらしいので様子を見に行くと、ユウコが「ケンジくんと忍者やってるの!」と言う。「えっ? あっという間に違う遊びになってる!」と驚く。



ケンジ、タカオ、ユウコら五人が池の前でかたまつて何やらしゃべっている。ケンジが「隊長はタカオくんね、わかった？」とユウコに言う声が聞こえてくる。

「私もケンジ達と一緒に遊ぼう」と思い、丸く切った段ボール紙を持ってきて近くに行き、手裏剣の形を描く。「なんだ？」と見に来たので、「この手裏剣があれば大丈夫だ！」と飛ばして見せる。「僕も作って！」と言う声に答えて段ボール紙に絵を描く。他の男児も二人加わる。

ケンジは次々にイメージを出してくる。ケンジ「悪者の忍者がきた！」私「よし、やつつけよう」ケンジ「敵の城はどこだ？」私「あそこかもしれない。見付からないようにそうっとう行こう！」。ジャングルジムを敵の城に見立てて、鍵を壊し、中に入り、宝を探して……。そこへまた別の男児が二人来て「よし、ロープを持ってこよう！」と部屋から縄

を持って来る。宝を見付け（ちようど私が、別の女児からもったチェインのブレスレットをしていたので、それを宝にする）ロープで吊り上げたり、穴を掘って隠したり……。小学校のサッカーゴールの網と網の間に入って「つかまったぞ」「助けて」と仲間を呼んだり、つかまった仲間を助けに行ったり、……ハルキが「チョキチョキ！」と切る真似をするのを見てケンジが「チョキリットビーム！」と新しい技を考え出す。

排水口の網を見てケンジが「これは畏かもしれない！ 踏むと爆発するぞ！」と叫ぶ。「この穴を通って逃げたな」「忍法小さくなるの術だ！」「このヒビはなんだ？」「これも畏かもしれないぞ！」。他の子どもたちも次々に自分のイメージを出してきて、話がふくらんでいき、ケンジの顔も紅潮している。

### 記録を読み直し省察を加える

この日（五月三十日）、ケンジたちと遊んだ私は

とても楽しかった。道具など何もなくても「つもり」になって遊べる四歳児の世界を共有できる喜び！を満喫したとも言えはよいのだろうか。

その最初のきっかけになったのは、「二人は私と遊びたいのかな？」と感じたことだった。もしあの時、そう感じなかったら、あるいは感じただけで私のほうから声をかけなかったら、ケンジが何に興味を持っていかもわからなかったし、その後ケンジたちを追いかけて行ってまで一緒に遊ぼうとは思わなかっただろう。

では、「なぜそう感じ、声をかけたのか」と考えてみる。同じ場面に出会っても人により感じ方は様々であり、その感じ方によって対応のし方も様々である。ここでは、「私からの働きかけが足りないのだ」「もっと自分の思いを表現し伝えていこう」と省察したことが、ケンジに対する感じ方・かかわり方を変えるきっかけになっている。今までの私だったら、「ウルトラマンごっこをして楽しそう」

とか「電車で仲よく遊んでいるな」としか感じなかったかもしれない場面で、私の方から声をかけ、私の方から材料を運んで、「一緒に遊ぼう」という気持ちを表示している。その裏には、子どもには、やりたくないことは「やりたくない」と表現できる力があるのだという省察から得た、子どもへの信頼がある。

そして、その信頼に応えるように、ケンジたちは、私とのお寿司作りを早々に切り上げて、自分から違う遊びを始めている。その変わり身の早さに驚きながら、そこでも子どもたちへの信頼があるから、「私のやりたいことをやってみよう」と手裏剣作りを試みる事ができたのだと思う。

この日の流れを追ってみると、ケンジたちにとって、家を作ったり、ウルトラマンになったり、お寿司を作ったりしていた時間は、自分が心から打ち込める遊びを見付けるまでの過程として必要だったのだろう、と思えてくる。私自身もあれこれ試しなが

らその過程に付き合ったことが、その後の遊びで、それぞれに自分を発揮することにつながったのではないかと思う。

明日へ

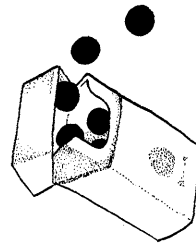
——いきいきと共に生きるため

“私”の気持ちの持ち方ひとつで、子どもとどういう世界を創り出せるかが決まってくるのだから、保育者の役割は計り知れない。単に“人的環境”などという言葉では片付けられない。“存在そのもの”が問われているように思う。子どもにとって、私の動きや言葉や雰囲気といったものは決してバラバラに感じられるのではなく、私という存在の全体が影響を与えているのである。私がそこにどう存在しているかによって、子どもたちはいきいきもし、またつまらなくもなるのである。

「虫探ししているのかな」「土いじりしているから見ていよう」と思っているだけでは、それだけで終

わってしまうが、私のほうから働きかけたことと子どものやりたいことがぴったり合った時には、子どもも私も本当にいきいきとした楽しい時間を過ごすことができるのだ。もしもぴったり合わなかった時は、その時点で軌道修正すればよいのだから、とにかく

“私”の思いを表現し、伝えてみないことには先に進まない。そして、ぴったり合った働きかけができるかどうかは、私が如何に子どものことをよく見て子どものやりたいことを理解しているか、私自身が子どもと楽しもうと思っているかにかかってくる。今さらながら、私が楽しくなければ子どもも楽しくないのだということを実感している。





いきいきしき

——倉橋惣三『育ての心』より

こうして、私自身がいきいきと生きることなくして、子どもがいきいきと遊ぶ生活は生み出せないのだということに思いを巡らせていたとき、ふと読み直した『育ての心』の中には、すでにそのことがずしりと重い言葉で語られていた。

『(前略) あなたの目、あなたの声、あなたの動作、それが常にいきいきしていなければならぬのは素より、あなたの感じ方、考え方、欲し方のすべてが、常にいきいきしているものでなければならぬ。どんなに美しい感情、正しい思想、強い性格でも、いきいきしさを欠いては、子どもの傍に何の意義をも有しない。

鈍いものは死滅に近いものである一刻一刻に子どもを蝕み害わずにはいない。いきいきしさの抜

けた鈍い心、子どもの傍では、このくらい存在の余地を許されないものはない』

〈いきいきしさ〉——この詩的な言葉には、今も昔も変わることのない保育の心と、保育者に求められる資質と、保育の楽しさと難しさと、そのすべてが言い表されている。

(東京都中央区立明石幼稚園)

\*この事例は、平成七・八年度東京都中央区教育委員会  
研究奨励園として取り組んだ研究〈いきいきと共に生きる——わたし自身を省察する——〉の一部である。

\*三年保育四歳児、男児十四名、女児十名の学級で、昨年度(三歳児)十一月の育児明けから引き継ぎ、そのまま持ち上がった。

\*本文中の子どもの名前はすべて仮名である。



## 米国の生活四十五年間の変化(1)

— 障害をもつ人は社会の片隅の存在ではない —

津守 真

今年の夏、メキシコで行われたOMEPP世界理事會出席の途上、私は、米国ミネソタ州ミネアポリス市を訪ねた。ここは、私が四十五年前に大学で二年間勉強していた土地である。最近二十年程の間に三回訪れたが、いずれも二、三日の滞在であった。今回は、私は、障害をもった大人のことについて、もう一度、勉強したいと思い、八日間をここで過ごした。

四十五年前に、私を泊めてくださっていたネルソン氏夫妻はいまなお健在である。



今回も私のために用意された同じ二階の部屋で泊まり、同じキッチンで毎朝、聖書を読んで朝食をとり、おしゃべりしていると、長い歳月はなかったかのような不思議な気持ちになる。ネルソン氏は九十歳で、夫人は八十歳である。私もその当時は二十歳のなかばだった。その頃、弁護士の子ネルソン氏は毎朝バスで出勤し、私も違う路線バスで大学に通った。ときたま、車でゆかれるときには、私も乗せてもらった。今回は、私の訪問先まで、毎日午前と午後と、ネルソン夫人が運転し、ネルソン氏が後ろの座席に乗って、送り迎えをしてくださった。かつての時のように私は大学までバスで行きたいと思ったが、そのバスは一時間に一、二本しかなく、自動車の運転をしない私には、こういう支援者がなかったら、一週間という短い期間にあちこち訪問することは不可能だった。公共の交通機関が一層不便になったのは、この四十五年間の米国の生活の変化のひとつである。

かつての日に、私がいつもベビシッターをしていた三歳のメリアンは、この間の年数を数えれば自分がいま何歳かわかるだろうと、ご主人と一緒に笑いながら、自分たちの周囲にいる障害をもつ人たちの話を、飛行場から到着したばかりの昼食の食卓で話題にしてくれた。これから一週間にいろいろの機会に知ったことであるが、いま、米国の社会では、障害をもつ人たちが一般の社会の中に深くまじりつつあることは、予想以上であった。また、問題行動という語の代わりに、チャレンジング・ビヘ



イヴィア (challenging behavior 挑戦行動) という語を普通の人が食卓で使っているのも、予想以上だった。攻撃的な行動は、人的、物的環境がかわると変化するということも、普通の会話の中で私は何度も聞いた。

ミネソタ州の北、約三〇〇マイルのファリボルトに、四十五年前に、大きな州立居住型施設があった。私は学生のとときに、そこに一週間泊まったことがある。現在どうなっているか、私は興味をもっていた。ここに来て直ちに分かったのだが、三五〇〇人いたこの施設は、いま、九十人を残してすべてコミュニティに移っている。そして一九九八年には全部閉鎖される。どのようにしてこのような変化が起こったのか、その人たちはいまどういう生活をしているのか。これは子どもの教育とも、社会生活とも深くかかわった出来事である。

到着した翌日、私はアウグスバーク大学にスカルヌリス先生を訪ねた。ファックスで何度も通信していたので、沢山の資料をもって私を待っていてくださった。先生は実際に居住型施設から障害をもつ人々をコミュニティに移す仕事をしてこられた方で、まず、ふたつの場所を訪ねるようにと直ちに電話してくださいました。ひとつは、ACT (Advocating Change Together 共に変化しようと呼導する団体) という、ピープル・ファースト運動のひとつである。もうひとつは、カポシア (Kaposia) という、施設から出た人たちの生活をコーディネートする会社である。



ピープルファースト運動とは、障害者というラベルを貼る前に、だれでもまず人間であるという主張で、最近十数年に米国全土にひろがった運動である。この運動なしに最近の米国の福祉に関する社会変化を語ることはできない。これはスカルヌリス先生が終始強調されたことだった。先生の編纂された「障害をもつ人のサービスのためのマニュアル」は四分冊から成るが、第一冊は、ヒューマンサービスをする人の認識を人間最優先に切り替えるための訓練にあてられている。

「どんなに重度の障害をもつ人も、自分自身の夢をもち、希望をもち、好きなことと嫌いなことをもっている。彼等は愛されることと愛を与えることと両方を欲している。彼等は他人からのみならず、自分自身からも尊敬されることを欲している。彼等は自分で何かを成し遂げ、自分の能力を使い、生産的な市民となることを欲している。つまり自分の生活の中で挑戦するものをもつことを欲している」

「過去において、また現在ですらもしばしば、障害をもつ人々は他人が助けてあげなければ満たされない要求しかもたない人々なのだと思われてきた。このことは本当ではない。障害をもつ人々は自分の才能を使う機会があまりにも少なく、自分が他人に与える機会があまりにもなかったために、そう思われてきてしまったのだ。この伝統的な考え方を、私たちは自分自身から変えてゆかねばならない。そして他人をも変える努力をせねばならない」



「障害をもつ個人を、障害の産物とみるのではなく、人間として見ることから、この仕事をはじめねばならない」

「一九七五年までは、この分野は暗黒の時代だった。歴史が示すようにラベルは個人を社会から締め出し、苦しみ、無視する。『遅れた子ども』『てんかんの女性』『自閉症の男性』というとき、その人の頭に刻印される語は遅滞であり、てんかんであり、自閉症である。人々は障害という語を記憶して、その人、市民、子どもを見ようとしていない。人間が第一であって、障害は第二であることを忘れてしまう」

スカルヌリス先生は別れ際に、制度は重要だが、個人個人のことを考えて環境をつくるのが根本であることを力説された。

今回の米国旅行では、この分野でとくに四十五年間の社会変化に驚いたが、人間を第一に考えることが、この分野の変化の動力になっていることを知った。

その日の午後四時から、ミネアポリス市に隣接するセントポール市にある公共団体のビルの一室で、ACTの会合があり、ネルソン氏夫妻に送られて訪問した。障害をもつ人八人程が会合をしていた。会長は車椅子に乗ったエネルギーな男性で、婦人セクレタリのK女史が専任で全体の世話をしていた。その日の会合では、数年前までファリポルトなどの居住型施設にいた人たちが大半を占めていた。通常の会合では、住宅、仕事、レクリエーション、学校のことなど、障害をもつ人たちが日々直面



している問題が話題になるが、この日は私が参加したので、いかに施設の生活が嫌だったか、いまは町の中に暮らして幸せかを、その人たちが次々に語ってくれた。障害をもつ人自身が自分のことを語ることに、また、ことばを話せない人に代わって語ること、そのための訓練の場を提供することもこの会の目的のひとつである。障害をもつ人と障害をもたない人との区別をなくす運動だから、この会合にはもちろんだれでもが参加する。K女史は、長く障害をもつ人たちの仕事をしてこられた人であるが、優しく前進的にリードしておられる姿は印象的だった。

二日目にここを訪問したときには、フアリボルトの施設にいた人たちが、その閉鎖の過程を示したスライドやビデオを用意して見せてくれた。一八七九年に設立された州立施設であるフアリボルトが、何万にも及ぶ障害をもつ人々をコミュニティから排除して施設に収容し、多くの人がそこで死に、墓地には番号だけで名前もなく、人間の権利を侵害していたことに対し、一九九六年一月十二日に、州議会は正式に謝罪文を出した。「発達の障害をもつ故に自分の意志によるのではなく州立施設にいれられていたすべてのの人々に対して、公的に謝罪することを決議する」という前文からはじまる二ページにわたるその文書は、悲痛ですらある。そして、この歴史を反省し、将来において、すべての障害をもつミネソタ州住人が援助を求めるときには、必要とする援助を着実に受けられるようにすると結んでいる。



ミッドウエストと呼ばれる米国のこの地方は、南北戦争の時代、南部から逃げてくる黒人を保護する進歩的な州として知られていた。四十五年前に私がここにいたとき、人種偏見と戦う一般市民の精神的風土に感心させられていた。いま、障害をもつ人々へのサービスについて、このような変化を遂げつつあるのを眼前に見て、私は再び驚いている。国土の広さも、社会の歴史も違う日本で、同じやり方が適合するとは言えないだろう。だからと言って、同じままで継続してよいとは言えない。人間最優先の考えは、日本の社会が必要としているものである。教育と福祉の仕事をする者は、思い切ってそこに立って、人間関係と環境を変える努力を必要としている。

翌日、私は、障害をもつ人とコミュニティとを結び付けるコオーディネーターの仕事をしている「カポシア」を訪ねた。「カポシア」とは、アメリカインディアンの語で、「一歩前進」という意味である。

OMEPPでも、十年前よりも一層、幼児保育の中に障害をもつ子どもが組み込まれるのが当然になってきている。これは世界中の動向である。機関紙OMEPPジャーナルでは、再来年にはこの問題が特集される。



# トポスにおける発達

## 第 11 回

—幼稚園のコーナーという場所—

無 藤 隆

無藤（一九九六）は、保育の中で子どもが獲得するはずの認識を「身体知」と呼び、身近な環境における対象に対する多様な身体的関わりの方を習得するものであるとした。また、その獲得の際に、具体的に幼稚園内の個々の特定の場所を持つ特性が重要であり、その場所に対する一種の適応（しかし多様性をもった）としても捉えたと指摘した（本連載）。ここでは、おそらく単に特定の場所にある物を使えるようになることを越えて、様々な使い方や関わり方をいろいろな子どもが持ち込み、互いの新たな混交が生じ、時に揺らいだり発展したりもするだろう。

ここでは、保育における活動において、特定の場所が持つ働き、またそこでいかにして新たな活動が生成していくのかを取り出したい。そこから幼稚園における環境が複数の場所から成っていると、その場所がどのような特質を持つのかを解明したい。

## 製作コーナーの活動とは

製作コーナーの活動とはどのようなものであろうか。いかに製作しているのか。他の類似の活動はそこに紛れ込んでくるのだろうか。

年中児の保育例を見てみよう。観察した幼稚園ではこの頃、お面を作っただけで遊ぶことが盛んであった。お面の図柄は自分で案は出すものの、ほとんどが先生に描いてもらう。それを子どもがクレヨンで色塗りをし、ハサミで切り抜く。まだハサミがうまく使えないで先生に励まされる子どももいる。切り抜いた後は、先生に輪を頭に合わせて作ってもらいお面にしてもらう。

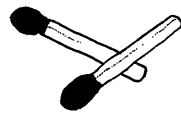
この場面で、先生と、M、J、K4、A3、Y2、D、K5、R3、Y3、K、H2、H、などがお面の製作に携わっており、途中でY5、Tが加わる。先生はMのお面作りを終え、Mに手渡す。Mはそれまで先生が自分のお面を作ってくれる様子をそばで見ているが、受け取った後、棚のところへ移動する。その時、

Y2は、自分では切れないことを先生に訴える。先生に励まされ、泣きそうな声を出しながらも席に戻り、続きを切ろうとしている。

先生はすぐにA3のお面作りに入る。Dがそこに来て、先生に何か

話しており、その様子をA3はじっと見ている。その他、先生は、Y5、T、K4、等と関わっている。その一方で、机では、H2がお面の色塗りをしており、Y3は立って切っている。R3はY3の様子を見ていたが、K5が誘いに来て、ままごとコーナーに移動する。Tはお面を作りたいと言って机に近づいてくる。K3は切り抜いたものを持って先生のそばにいる。Kは机と先生の間をうろろし、Y2の横にあったクレヨンを取って、席につく。Jは切り抜きの破れたところをテープで貼り、先生に見せに行く。

ここでは、お面作りを中心として活動が成り立ち、各々の子どももその一端を行っていることは確かであ



る。その意味で、同じ活動を並行していると言っている。だが同時に、各々の行っていることはお面作りの行程の様々な部分であり、バラバラである。これからお面を作る子どもから、作り終えた子どもまでいる。また、うまく出来ないところを先生にやってもらおうにせよ、それもまた様々な部分を補助してもらっている。さらに、お面作りに関わってかどうか、先生とおしゃべりが主になっている場合もある。子ども同士のもの貸し借りや提供以上の協力活動はあまり見られないが、互いの活動や先生が補助している様子を見ることはしばしばなされる。

要するに、お面を作るということ、そして、お面作りに関連する材料をめぐって、一人一人の活動が並行している。その並行の時間的ずれは大きく、すべての行程の部分が同時的に行われている。それを眺める子どもにとっては、どの部分にせよ、その見本を見ることのできるとも言える。保育者は、絶えず、子どもの求めに応じ、時に手伝い、時にそちらをみてうなず

く。特定のことは手伝い特定のことは手伝わないといったことではなく、子どもの必要性に応じて判断しているようである。結局、お面という物、お面を作るという活動が、子どもの間を、また子どもと保育者の間をつないでいる。それはさらに具体的には、机に向かい、素材や道具を用いるという一連の行為からなることである。

#### 製作から別の活動へ

一人の子どもの製作コーナーでのお面作りから他の活動へと移行するまでを見て、製作の活動の持つ意味を検討したい。

年中児Yがお面を作り、お面をかぶってRと遊びに行くまでの流れである。Rが先に登園してお面の色塗りをして見ているのを見て、自分も作ると言って席につき。図柄を選ぶために本を持ってくるが、Rがのぞき込んできて会話が始まる。その内に、Rは自分のお面の色塗りに戻り、Yは一人で本を見始める。先生に

「お面を作りたい」と伝えるが、先生はコーナーの机を増やしているところで応じられない。その後、Yは外に視線を映し、Hが登園したことを見つけ知らせる。また本を見て、先生に作りたいものを示す。先生はYに気づき、言葉は掛けているが、机の上の整理をしている。Yは本を替えに行った後、またRと話し始める。「違うのにする、これRちゃんのに……」こう言った後、また図柄選びが始まる。Y2がクレヨンを取ろうとしているのに気づき、届くところに動かしてやる。そこでY2の絵に興味を持ち、助言をする。また本を見るが、ときどき先生のやり取りや、ままごとコーナーも見ている。しばらく見た後、先生に描いてもらいたい図柄を示すが、RやNと会話を始め、その後また迷い始める。突然、「あつ、いいこと考えた」と言い、先生に決めた絵を見せる。Nがハサミに手が届かないと言っているのを聞き、Nへハサミを渡してやる。その後、Yは先生の近くに行き、絵を描いてもらい、席に戻って色塗りをする。先生にお面にしても

らって、Rと室外に遊びに行く。

おおむね、お面作りの絵をどうするかを考えたり、描いたり、先生に描いてもらおうとしているのであるが、間で様々なことをしている。多くはその場で見聞きしたことへの連想からの発言や行動である。まわりの子どもの言動に疑問を出す（「何ですか？」。子どもの登園を見つけ知らせる（「Hくんきました」）。本の内容にコメントする（「ブルートレインの方が速いんだよ」など）。友だちにクレヨンを取ってやる（「何？」）。絵に助言する（「違うよ、そんなの。黒と水……白で塗ればいいんだよ」）。机のそばに入れないA2にからかいめいたことを言う（「Aちゃん入れませーん」）。友の言うことをからかう（Nが「かぶと虫大好き」と先生に言ったのに「嫌いって聞こえた、Nくん」）。友としゃべる（「ぼくギャラクシーシールも買ったよ」）。ハサミを取ってやる。友に電車を描いたらと助言する（「K2、これ描きたいだろ」）。友を机の下からくすぐる。

そういつた余分なことをしながら、お面を作るとい  
う活動は完成させている。最初にクレヨンを取り、  
「僕も作るんだあい」と宣言する。本を取ってきてお  
そらくどういふ図柄にするかの参考にする。先生に  
「ねえ先生、お面」と作ってもらうよう頼む。先生は  
別なことで忙しく無視する。本を見て「ねえ先生、こ  
れ作りたい。れんごう車」と先生に言う、先生は  
「れんごう車？ どれ？」と見る。別な本を持ってき  
て、「ねえ、このやつ描いて。先生これ」と言う、先  
生はYをちらつと見る。Rと会話して「どれにしよう  
か」と言う。再び本を見て「何にしようかな」と言  
う。先生に本を見せて「ね、これ。遠いところまで行  
くの」と言うと、先生は「はい、どれ？ それ……ね  
え。遠いところまで行くの？」と相つちを打つ。「ね  
え新幹線、この……」とまた先生に言う、先生は  
「うんちょっと待ってて」と応ずる。また本を見なが  
ら「どれにしよう」とつぶやく。そうしている内に、  
「あ、いいこと考えた。これにしよう」と本を指し、

「先生、これにしたよ。ね、ね、ね、先生、これ  
にした」と先生に言い、先生は「はいはい」と受け  
る。少しして、再び、「ねえ、先生、先生、先生、先  
生」と本を持って先生のところに行く。今度は、先  
生はYのお面の絵を描く。その絵に色塗りをする。ハ  
サミを取り切る。ゴミを拾い、籠に入れる。また切  
る。ちょうど外から戻ってきた先生に、「先生できま  
した」と持って行き、見せる。はさみやクレヨンをし  
まう。先生はYのお面を完成する。先生がYにお面を  
かぶせる。「あのね、これとね、Rちゃんね、僕の  
ね。仲間なんだよ」と先生に言う。「行ってこよう  
ぜ」とRと外に行く。

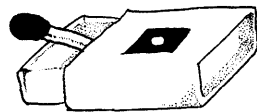
このお面作りの主な流れは簡単である。絵を本から  
選んで、先生に描いてもらい、自分で色塗りをして、  
ハサミで切り取る。輪にするなどを先生にやってもら  
いかぶせてもらう。長く掛かったのは、絵を選ぶのに  
迷っていることと、先生が他の子ども・仕事にかまけ  
ていることが多かったことによっているだろう（先生

はあるいはYが迷っていることを見て取ってすぐには対応しなかったのかも知れない)。Yも本当にこれだという確信が出来るまでは先生に執拗には頼んでいない。「いいこと考えた」と決まっただけからの頼み方の執拗さとそれ以前のあきらめのよさとは対照的である。絵が決まって先生に描いてもらってから比較的其他の行為が混じらずに完成に向かっていく。

このように、お面作りを行う過程を自分のお面作りに直接関係する行為とそうでない行為に分けてみると、子どもがその両方を混ぜ合わせながらやっていることが分かる。さらに、様々なまわりの子どもの様子を見るだけのことを含めれば、もっと混じっている度合いは大きい、絵が決まっただけでも、脱線めいたことをしている。だが、同時に、そのように脱線しながらも、お面作りということからまったく外れてしまうことはないように見える。お面作りのコーナーにほぼずっといるのだし、外れていると言っても、多くはそれに関連しての他の子どもの活動への注目やコメント

であり、また参考になっている本からの連想である。また、そのコーナーから見えたり・聞こえたりすることに応答する範囲のことである。何より、お面作りをまわりの子どももやっており、材料や道具があり、自らの参考にするための本があり、といったことにも支えられているだろう。また、お面作りの主な行為を保育者にやらせようという習慣が活動のポイントとなるところをはっきりとさせ、同時に、待ち時間を増やしていることも明らかである。

以上、特定の場所にふさわしい活動を行う中で、しかし同時に、その活動を決定的にダメにすることはない程度の外れ方をしつつ、メインの活動に戻る様子が示された。身近な環境要素（机や道具や素材また他の子どもや保育者の活動）とそれが日頃使われている仕方から来る期待が複合しつつ、特定の活動の維持を支



えていることが分かる。同時に、活動が一直線で進むのではなく、そのまわりで揺れを示しながら、メインとなる活動に戻る形で進んでいることが分かる。その揺れの中に、まわりの友だちとの親しみをもった交渉とか、助言・助力とかが生じている。また逆に、自分のメインの活動の参考になる情報を得ているようにも思える。あるいは、最終的に自分の作るものを決めたときの確信の強さを支えているのかもしれない。

### 作品の発展の様子

製作コーナーでの活動の発展の仕方の一つの例でやや詳しく追ってみよう。揺れながらも、流れの中から一つの作品が結実していく様子を見て取ることが出来る。

年長児Tは、Jと一緒に先生から紙をもらい、ハサミで切り始める。S2が片付けに来るのに、片づけないように言う。S2は自分の作品をJに見せようとする。それをちらっと見て、自分の作ろうとしているも

のを独り言のように言っている。厚紙を切っているときにJから「これちょっとさ、そのまんま出来ないよね」と作品について相談を受ける。しばらく会話が終わされた後、ジェット機以外にいろいろな紙でロボットも作る、と言う。さらに、笛を吹きながらTの作品をのぞきにきたMと、今日遊べるかどうかのやり取りをした後、Mの「これ船でしよう？」という質問に「これジェット機」と答える。そこで、「乗ったことないけどね、お友だちちでね、見たことある」と自分の経験を話している。しばらくTの様子を見た後、MはTの作品に助言する。初めはMの言うことを聞いて、その通りにしようとしたが、途中でMが作品の一部に手を出したのをきっかけとして、自分なりの考えを伝え、通す。Mも「なんだ、そう貼るのか」とTがテープを貼るのを見ている。その後、色を塗り、テープで貼る。Jと相談しつつ、JとTの作品を合わせようとする。てんとう虫を見に行ったりしながらも、作品を作り続ける。

明らかにTはこのコーナーで自分の作品を作ることが出来た。だが、その経過を辿ると、単にそこにある素材と道具ですんなりと作っているわけではない。様々な中断や迷いがあり、それが時に何を作るかに影響している。もう一度何を作っているかという点で流れを整理してみよう。その発言を見てみる。

初めに紙を持って、「あつ、トレーラー作ろう、僕」と言う。三角の切れ端を二つ持ってくつつけて「ヨットになったぞ」とする。「僕はね、忍者デストロンみたいに作るのだ」「シックジェットみたいの作るんだ」と言う。「ロボットのね、いろんなかたい紙で作んの」「シックショット作るからね」と言う。「これがジェット機」と答える。これらは、何を作るかのイメージを語っている。結局、ロケットらしきものを作ることになる。

また、作業の方法からどうするかを述べる場合がある。「いろんなテープで貼りつけていくの、なあ」と言う。「切っちゃえばいいんだよね。ちっちゃく

ね」「あ、こっちを切っちゃえばいいんだよ。」「色は、僕、黄色、オレンジにしよう。」「やっぱりこちに合わせない?」「あっそうだ。ここ切る、ここ。また、もちろん、作業としては、紙を切り、並べ、貼る。線を引く。色を塗る、などをしている。

さらに、友との会話の内容が関連することがある。

Jが「僕ジェット機作る」と言った。S2が「僕、こんなふうで作ってるよ、Jくん、見てごらん」と言った。JがTと作品について相談する。Mが来て「これ船でしょ」と尋ねる。Mが切ることに助言する。Jが「おかしい? これこんなふうにするの」と作品についてコメントする。JがTの作品をのぞき、取って切ろうとする。Yが「何作ってるの?」と尋ねる。Yが「Jくん人間作ろうよ」と言う。こういった発言はおそらくその後のTの行動に影響し、作品作りに多少とも変更を加えることになっている。

最後に、作品を使って遊ぶことがある。てんとう虫が見つかったので、作品のジェット機を「発進」さ



せ、てんとう虫を乗せさせる。乗せさせる前に、そのつもりで「ジェット機」を加工している。

何が決定的な動機かは分からないが、最小限、この作品が出来るにあたり、初めからのTの心づもりと共に、友だちとの会話が影響しているに違いない。また、作業する行為自体が作品を自ずと作り替えてもいるだろう。コーナーが持っている素材と道具から可能となる行為可能性と、友とのやり取りの中で現れてくる特定の幅の作品の可能性の交差する中で、いわゆるイメージとか目標が生まれているように思える。少なくともこのコーナーに来る前から明確な目標を持っているとは思えない。初めに「僕も何か作る」と言っていることでもそう思える。ハサミで切り始めて、「あっ、トレーラー作ろう」と言うのだし、次に三角形を合わせて「ヨット」と言うのである。もちろん、テレビ番組のキャラクターが途中で思い起こされるようであるから、それもまた影響しているであろう。最終的な作品はこの長いエピソードの流れの中で新た

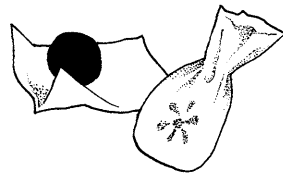
に出現してくるものだとということが重要なことである。とりわけ、てんとう虫のエピソードは偶然に生じたものであり、それを作品作りに取り入れたのであるから、余計に、「創発的」なのである。

なお、片づけとか、今日遊ぶかどうか、キョんシー遊びとか、ままごと遊びとの境の争いとか、てんとう虫とかは偶発的なこととしてこの活動に入り込んでくる。各々、簡単に処理して、作品作りに戻っている。てんとう虫だけは今見たように作品作りに取り込まれる。外からの攪乱に揺れながらも作品作りは進行するのである。

(お茶の水女子大学)

## 今を生きる

松井 とし



クリスマスの頃になると思い出すことがある。

あれはもう、三年ほど前のことになるだろうか。旧ソビエトが崩壊し、モスクワ中央地下駅にホームレスの人々があふれている、といった状況を伝えるテレビ中継だったと思う。カメラはその中の一組の親子に近づいていった。母親の膝の上で、無心にパンを食べている小さな男の子。今、この時のささやかな幸せを、文字どおり噛みしめ、嬉しさがこみ上げてくるといった子どもの表情。そのようすをかすかに微笑んで見守る若い母親は、気高く、優雅で、まるでマリアさまのように感じられた。どういふ事情でホームレスになったかは知る由もないが、その後の親子の厳しい生活を思い、胸が痛んだ。母親の静かで、寂しげな微笑み。それにひきかえ「今、まさに、この時を生きている」うれしそうな

子どもの姿が、心に焼きついている。

昨年のクリスマスには、新聞にパキスタンのペシャワル山岳地帯の無医地区の人々の診療に当たっておられる中村哲医師の話が紹介されていた。

パミール高原の一角、標高三八八メートルのポローゴル峠に着いた先生は、一軒の小屋から呼ばれて生後十か月の乳児を診察する。手遅れで、息もたえだえの赤ちゃんを診察した先生は、その夜か翌朝までが峠だということを告げる。薬に息が出来るよう抱き方を教え、ひとさじの甘いシロップを与えた。するとその瞬間、赤ちゃんはにっこり微笑んでそして、その夜亡くなったという。

引用されていた先生ご自身のことは、「死にかけて赤子の一瞬の笑みに感謝する世界がある。シロップ一さじのささやかな治療が恵みである世界がある。生きていること自体が与えられた恵みなのだ」(毎日新聞「余録」平成七年一月二三日より)。

子どもたちとの生活を離れて久しい今の私は、例年通り事業が無事に終わるたびに、ほっとしてはカレンダーを消している。

悲しいくらいにけなげな幼な子の姿から、感謝を忘れた日々を、受身的に過ごしてきたこの一年を振り返った。

(元幼稚園教諭)

## 教育実習を考える

原口 純子

### はじめに

二年次の教育実習を終わって、キャンパスに帰ってきた学生の表情は、一つの事を成し遂げた充実感で生き生きしています。出かける前の心配そうな、自信なげな表情から比べると大違いです。学生によってみちがえる程の成長を感じさせます。それ程

に教育実習は教室では成しえない教育力を持っています。この三週間に幼児に育てられ、実習園の先生

方に育てていただいた賜物と思います。教育実習は幼児教育科の各教科が総力を挙げて育ててきた事柄が発揮される総合教科なのです。二年間の中で最も充実した言わばハイライトなのです。この経験を通して、学生は職業としての幼児教育を自覚し、我が身の適性を省みます。

私は三月まで公立幼稚園の園長をしていましたが、四月から保育者を養成する仕事に替りました。

教育実習という事から言えば、受け入れ側から依頼する側に一八〇度替った事になります。

そこで、教育実習について受け手の側と依頼する側との両面からの経験をとおして、保育者を育てることについて考えを述べようとするものです。

### 教育実習を受け入れるということ

幼稚園に在職中には、それ以前に保育養成の短大に勤務したこともあり、養成校側に対して理解ある園長で、頼まれれば可能な限り引き受けていました。一年次の観察実習でも、二年次の教育実習でも受け入れることにしていました。

地域にある短大の学生を毎年、五月（一年生）と十月（二年生）に受け入れていましたし、不規則に卒業生が出身園として実習に来ていました。

実習生を受け入れる事は指導に手はかかるし日記のコメントや指導案の指導等、担任にも負担がかかり、幼児はかき乱されるし、時には貸し出した紙芝

居や本はなくなるし、行儀が悪い等々一般には敬遠されがちですが、次の理由から私は教育実習生を必ずしもマイナスとして受け取ってはいませんでした。教えることは育つこと

以前は実習生をいつもベテラン保育者のクラスに配属していたのですが、ある年実習生が重なってやむをえず就職して二年目の保育者のクラスに配属させることになりました。いつも一番下で、自信もなく経験のある保育者について歩くような感じでしたが、自分より年若い人が学びに来ることにより、指導的立場に立つことになって俄然力が入りました。実習生の幼児への言葉づかいや、絵本の読み方などから自分のやり方を振り返りました。指導案の書き方も先輩の先生や主任に相談し、どう指導したらよいかを学びました。環境の整備、日記のコメント等を実習生以上に真剣に取組み、三週間が終わった時には保育者として、一皮脱皮したくらい成長が感じ

られました。園長が注意したり指導してもなかなか納得のいかないことも、実習生のことを見て、自分で感じてわかったり、気づくことが成長につながったのです。

実習生は若い保育者と年齢も近く、何でも気軽に相談ができ、企業就職を希望していたこの学生が、終わる頃には、保育の道を目指そうかと真剣に迷っていました。

#### 自分のクラスを客観的に見る

たとえベテランの保育者でも保育の渦中にある時と、他人が保育をしている時に外から我クラスを見るのとは見え方が違います。いつもおとなしく目立たない女児がままごとコーナーで思いの外きつい言葉で、弱い幼児を拒否している場面を見たり、仲良しグループと見えていた男児グループの友達関係が微妙に変わってきている様子に気づいたりします。

幼児の動きを見てクラスの環境設定を見直してみ



る等、客観的にクラスを見る機会は大切です。  
人手としての実習生

小規模園の場合大人の手が足りずやりにくい保育活動があります。人手が沢山欲しいアスレチックのある運動公園の園外保育や巧技台やマットを沢山使うサーキットの遊び、担任一人では手が回りかねるクッキング等実習生が来ている時に組むことが多いのです。もちろん行事ばかりでは困りますが、こ

れらも大切な保育活動であることを知ることは無駄ではありません。幼児の降園後の時間にお用バンドをまとめて作ってもらったり、普段担任だけでは手にあまる仕事を手伝ってもらう事も多いのです。保育内容上の人手としての実習はあまり問題はないと思いますが、この時とばかりにどぶさらい、草抜き、倉庫の整理などさせるという話も聞きます。確かに幼稚園の環境整備ではあるのですが……。

#### 保育日誌

学生にとって実習日誌はかなり負担になるようですが、よく書けた日誌は保育者に参考になるものもあります。一般に保育者は実習日誌のように細かくは書きません。日誌の中に思いがけない発見があったり、自分とは異なった実習生の気づきに教えられることもあります。

#### 思いがけない教材

一人の保育者が持つレパトリーというのは、その人なりに決まったものがありますが、実習生が持

ち込む教材には、時としてびっくりするような、あるいは斬新なものがあります。幼児にとってもちょっと変わった面白い経験ができます。その後保育者がうまくアレンジしてレパトリーに加えるなどということもあります。

#### 若いエネルギー

保育者が高齢化しつつある公立幼稚園などでは、実習生の持つ若いエネルギーは幼児にとって魅力的なものです。保育の上手下手ではなく、はつらつと体を動かし、幼児と共に走り、サッカーを興ずる若い生き生きしさが幼児をひきつけるのです。

園にとって実習生がいる期間は緊張があり、うっとうしくもある上、実習ノートのコメントや保育指導その他、お手伝いしてもらうことの段取りまで何かと忙しく、終わるとほっとするものです。これまでも随分沢山の実習生を迎えて来ました。すぐにも採用したいような学生から、明らかにやる気のない学生まで実に様々です。どの人も初めはまるで機械

仕掛けのロボットのように緊張しきって来ていますが、次第にほぐれて、笑顔が見られるようになります。三週間が終わって別れの挨拶をしながら、ぼろぼろ涙をながす姿に、初々しい感動が伝わってきます。

教育実習生を迎え、負担ではあるけれども学ぶものもたくさんありました。

### 実習生を指導すること

一年次の観察実習は五月の後半から九日間（二週間）来ていました。

年齢による違いを知るために、一週ごとに配属を変え四歳と五歳のクラスを経験させていました。幼児を見る、幼児と遊ぶ、幼児を知ることに重点を置いて、九日間の実習が終わった時に子どもにも興味や親しみや喜びを見いだしてもらえばよいと考えていました。

入学して間もない五月ですから、高校生同然の素

人で、元気よいベビーシッターのようなものでしたが、危険でない限り文句をつけず遊ばせていました。見ているだけでは、幼児と生活する喜びは感じにくいからです。

二年次の実習はクラスを固定して、幼児の名前をおぼえて、担任の学級経営に添わせて、観察、部分保育、一日保育と三週間の実習をします。実習生には園概要、教育課程、指導計画部分抜粋、園だより、クラスだより、給食予定表、実習計画表を渡します。

教育要領が改訂されて、実習生を迎えた時に、環境を通して行う教育における教育実習の在り方はどのようにあったら良いかと、悩みました。「遊びを通して指導する」ということを学生にどのように経験させたらよいのでしょうか。

部分実習というとかく紙芝居や絵本、あるいは製作活動などの教師主導型の場面をイメージしがちです。けれども幼児教育は環境を通して行う教育で

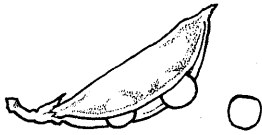


すから幼児の遊びへの関わりこそ大切な部分実習であることを自覚しなければなりません。幼児が主体性をもって環境に関わる遊びへの、保育者の関わりや役割が実習を通して理解されないと、どんなに絵本が上手に読めても、保育者として成りたないことになりません。

### 遊びを通して指導するために

遊びの関わり方を教えることはむずかしいことです。教育実習で、遊びへの関わりはしばしば勘定の外になっていて、部分実習の意識もないことが多いのです。学生も「あ、遊びなら大丈夫、遊べるから」と気楽に思いがちですが、この遊びで幼児を育てようというのですから、これこそ真剣に真剣に取り組みなくてはならないものです。

遊びへのかかわりの指導



は意外にむずかしいのです。熱心に取り組む学生は幼児の遊びを壊して自分のやりたい遊びを押しつけることに満足感をもったり、自分中心に遊ぶのではなくもっと幼児の遊びを見るようにしようと、無関心な表情でぼーと立っていたり、幼稚園側の思いはなかなか通じないのです。

遊びを通して幼児を育てるために実習生に育てたいものは、ありきたりではありませんが、①幼児理解と援助 ②遊びの内容を見る目 ③幼児の育ちに相応しい遊びの種類、環境や教材の研究です。

① 幼児理解と援助（共に在る・心を添わせる・見ている・必要な時援助する）  
かかわる

観察は幼児理解の方法ではあるが、ただひたすら誰と誰が、どこでなにをしているかだけを見るような観察ではなく、もっと心をよせた、そこにいる幼児の気持ちに添った見方、感じ方がほしいのです。

カウンセリングマインドで幼児に接することができるとも望まれます。

実習としては、最初の二日間ごく普通の幼児に朝から降園までずっとついて、観察し、遊び、その幼児の立場や気持ちになってみるという経験を持たせてみます。男女一名ずつ経験します。メモ、ノートなど持ち歩かず心に刻むのです。実習を教師の立場の練習ではなく、幼児の立場の練習で始めるのです。

## ② 遊びの経験内容の理解

この遊びの中で、幼児が何を、感じ、何を、経験しているかを読み取る目を育てたいのです。幼児理解と重なる部分もありますが、特に取り上げるのは、経験の内容の理解こそ、環境を通して行う教育の基本だからです。保育の記録を取るのもいろいろ使い方はあります。自主的に元気に遊んでいるからと放任されがちな、そこらを飛び回って幼児の遊びも、一度経験内容の分析をしてみたら、もっと成長に相応して環境を整えることへの足がかりをつかむことになるかも知れません。

## ③ 環境の設定（教材、遊びの提供も含めて）

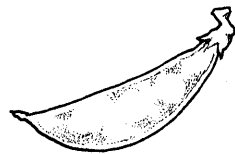
成長や興味関心に合わせた教材や遊びを適宜提供できること。「人生で必要なことは全て砂場で学んだ」という方もいますが、それは象徴として

のことで、実際に手で触れ、体を動かして、経験させたい遊びはたくさんあります。

実習生が色々な教材や遊びを環境として提供してみることはよいことです。もちろん担任と十分な打ち合わせの上でのことです。労を厭わず、果敢に教材を集めてくるのは実習生の良いところです。

### クラス全体をまとめたり、掌握する経験

一人一人を大切に、遊びを通して教育するといっても、クラス全体で行う活動も集合して行う活動もあります。絵本、紙芝居、給食、帰りの会、フォークダンスやゲームなど一斉に行う経験も実習生には



大切です。学生によっては、一斉課題活動が多い幼稚園に就職することもあるのですから、基本的なこととは経験させておくことにしていました。

#### 指導案・日案

養成校側にまわって困惑したのが、指導案の書き方です。幼稚園では、我が園の教育課程や指導計画、幼児の実態に合わせて、園の指導案の書式により書かせていたのですが、短大には実態がない、指導計画もない週案もないというわけで、基礎となる事柄は説明できませんが、空疎なものとなります。短大では教えたつもりでも、学生はよくわからなかったということになるのではないのでしょうか。

幼稚園側から指導案の書き方も習ってこなかったのかと非難されそうですが、実態に合せるものは、短大では教えにくいのです。

#### 養成校がなしうること

幼児教育に当たる者には「歌って踊って元気よ

く」ばかりでなく、その人なりの価値観や人間観、保育観をもって欲しいと思うのですが、二年間という時間は即物的なことにはばかり押し流されてしまいがちです。先日の実習園と短大の実習懇談会の席で、幼稚園側から「保育者として育てて欲しいのは知識や技術ではなく、感性を育ててほしい」との話がありました。確かに幼児教育に携わる者として、よき感性は何にも替えがたいものです。しかし、感性や人間性は養成校で教えられる物ではないのです。やむをえず基礎的な知識や技術や保育観を身につけるべく努力をしているのです。

感性を育むのは、幼児教育の大切な課題なのです。

(洗足学園短期大学)



子どもの本から

## 大きな足の女の子の英雄

皆川美恵子

アメリカ合衆国が形作られる時、辺境開拓（フロンティア）の厳しい生活の中から、英雄をめぐる民間伝承が生れてきた。たとえば、ダニエル・ブーン（一七三四—一八二〇）の伝説は、ケンタッキーの未踏の荒野を舞台に、彼の勇氣と冒険が英雄として賛美された。デイヴィ・クロケット（一七八六—一八三六）の物語は、テネシーの森の開拓の王者とし

て、熊よりも強かったと歌にまで歌われ称賛された。

愛すべき英雄たちは、素朴で荒れており、腕力のもとより忍耐力もあり、勤勉で独立心に富み、さらには、ホラ話や冗談も巧みな、民衆が憧れてやまない人物像である。アメリカの西部開拓は、やがて太平洋の海岸にまで達し、はるか大海原を越えてべ

トナム戦争に及んでゆく。古きよき時代の、アメリカの愛国心を鼓舞してやまない英雄伝説には、陽気な原始的な野獣性が燦然と輝いており、ベトナム戦争が敗北で終結するまで、その伝統的な輝きは衰えることがなかったといえよう。

ところで本作品は、アメリカ民衆の英雄伝説に水脈を発しているものの、一捻りも二捻りもきかせ、新しい息吹きが存分に吹き込まれた現代における伝承物語の創作である。まず一捻りとして、主人公の英雄は、強い男ではなく、愛くるしい女の子を登場させている。一八一五年八月一日、テネシー生れの女の子、アンジェリカは、二歳の時に、父親からもらった青い斧で木を伐り、丸太小屋を立ててしまふ。十二歳の時には、幌馬車隊が沼の中で立往生しているとき、小枝のように軽々と幌馬車を持ち上げる。

そして物語のハイライトは、凶暴な大熊退治であるが、強力なアンジェリカは、後でも述べるよう

に、たくましい足の持主として描かれており、画面上、荒々しい暴力性は払拭されている。スカートをはいいたアンジェリカは、何日にもわたり熊と格闘を繰り返す。しかし、英雄伝承につきものの大ボラ

▲「せかいいち大きな女の子のものがたり」

ポール・O・ゼリンスキー絵／アン・アイザックス文  
落合恵子訳 富山房 一九九六年



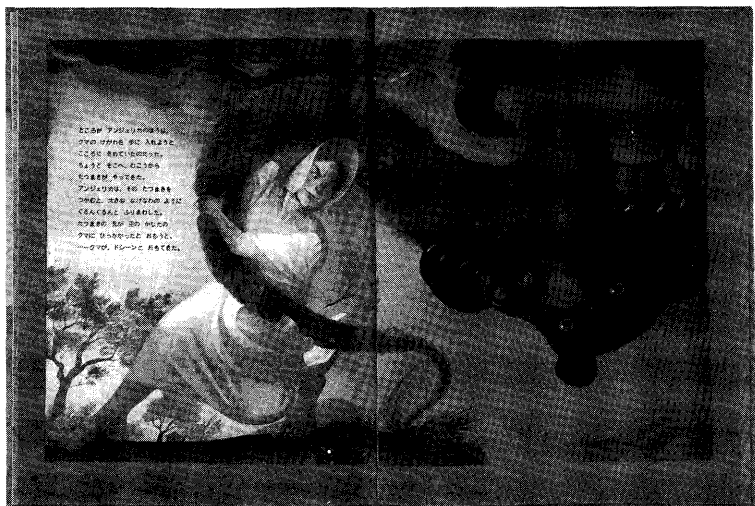
話によって、その戦いのスケールは雄大そのものであり、ユーモラスでもあり、痛快である。たとえば、アンジェリカは竜巻きを輪投げのように振り回し、熊をひっかける。またアンジェリカと熊は、長い戦いの途中で眠り、共にすさまじいイビキを合唱し、イビキが岩をくだき、森の木をすべて倒してしまふというように。

次に、この作品に仕組まれている二捻りについて述べてみよう。熊は、開拓者を襲い食糧庫を荒らす、ならず者と位置づけられている。アンジェリカは人々のために熊退治をするのだが、素手で正々堂々と取っ組み合っている。不運にも熊は果てるが、みなが打ちそろって熊をたいらげる大宴会の夜の画面には、三日月が明るく輝いている。その月は、まるで熊の魂が冴えわたっているかのような、ふるえるばかりの美しさである。物語の結末では、今でも熊は大熊座となって夜空をめぐり、輝いていると説明されている。

このように、熊はただ悪者として退治されるようには描かれてはいない。凶暴なものに、さらなる凶暴さをふるってきたアメリカの歴史を反省する視点が見てとれるものである。敗者となった熊への配慮に、そして可愛らしい力持ちの女の子の主人公に、現代という時代に創作された新しい英雄伝説を認めることができる。

さて、本作品は、絵本として眺めても絵がすこぶる美しく、秀逸である。開拓時代のプリミティブ・アートの雰囲気漂わせるかのように、描写は素朴で力強く、懐かしさに溢れている。木を削り、木目を浮き出させた板に描かれたという画面は、重厚な色彩とあいまって歴史画のようであり、木目が額縁の効果も發揮して、画面、画面、見事に古い時代を固定していよう。

また、アンジェリカの途方もない大女ぶりは、山脈、平原、湖の背景画によって対比的に表現されている。その上、帽子をかぶってはいるものの、足は



▲たつまきの先が空のかなたのクマにひっかかるとおもうと、  
……クマが、ドシーンとおちてきた。

裸足で、荒野の大地を踏みしめる大きなたくましいばかりの足によっても、鮮やかなに物語られている。さらにはまた、いつもアンジェリカの側にいる犬は、アンジェリカの赤い髪と同じ色をしているが、きわだってちっぽけに描かれている。小さな読者たちは、おそろききつと、この犬のようにアンジェリカの足許から優しい女巨人を頼もしげに見上げることだろう。絵本作家としての画家ゼリンスキーの技が光る趣向といえよう。

なお、本書の原題は『泥んこ天使』だが、訳者は「世界一大きな女の子」と元気にホラを吹いている。アンジェリカに、まるで大向うから声援を送るかのような「世界一」の掛け声は、魅力的な絵本をさらに魅力的にしてやまない。

(舞々同人)

\* 「子どもの本から」は年四回掲載の予定です。

外国の文献から

## 『心情と知性の教育』

### —日本の就学前と小学校教育に関する考察—

#### 第五章 自律の原点

古賀 松香

日本の子どもたちは、大人の直接的な管理がなくても、授業の前にはいすに座って静かにしたり、クラス会議を運営したりといった活動を、自主的に行う。それは、何らかの褒美や罰があるからではない。寛大な家庭で育っている日本の子ども

もたちが、なぜこのような行いをするようになるのかということについて、幼稚園や小学一年生のクラスの自主運営の例をみながら、探っていくことにする。



## 帰りの会

帰りの会は生徒たちが運営するもので、生徒や教師がその日の活動を振り返る機会となっている。典型的なスタイルは以下のものである。

当番と呼ばれる二人の司会者が前に出て、クラスを静かにさせる。「目当ての反省」「気が付いたこと」「係からの連絡」「先生から一言」「さようなら」という項目にそって、会を進行していく。例えば、その日の目当てを達成できたと思う人に挙手をさせるとか、「気が付いたこと」で挙手している人を指して報告させるといったことを、当番の子どもが行う。また、「係からの連絡」では、花係の生徒が教室に花をもって来てくれた人にお礼を言ったり、図書係の生徒が図書室の本を大切に扱うよう、クラス全体に注意したりする。教師は、「先生から一言」というところで、その

日気づいたことをコメントする。そして、当番がみんなを立たせ、「さようなら」を言うのである。

### みんながリーダー——当番制

日本では、少数の子どもにリーダーになる特権が与えられるのではなく、生徒全員が順番にリーダーとなる。それが「当番」と呼ばれるシステムである。当番になったものは、教師と共にリーダーシップをとり、みんなに「くん」や「ちゃん」ではなく、「さん」づけで呼ばれる。

リーダーになることは一見立派そうだが、その仕事は決して簡単ではない。仕事の内容はクラスによって様々だが、必ずリーダーとしての明白な役割を担っている。例えば、幼稚園では、食事の前に静かになっているかどうか確かめて「いただきます」を言う、一年生では、授業の前にみんなを集め、静かにさせる、会を運営する、他の子の

態度を評価する、問題解決にクラスを導く、といった仕事である。

子どもたちは当番表をチェックしたり、次は誰の番かということを興奮して話したりするので、当番制に熱中していることがわかる。この当番制は、注意をひく、信頼される、他の子をリードすることへの子どもたちの自然な興味を利用してよいのである。また、責任感という、喜びでもあり頭痛の種でもあるものを経験する機会にもなっているし、教師などの権威をもつ者に対する同情心をも育っているのではないかと思われる。

### 係活動

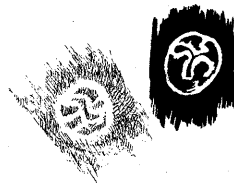
係は、クラスの生活をいかに高めていくかについでに、生徒たち自身の考えに基づいてつくられている。学校が始まる前や休み時間、給食時間、毎週あるクラスの会議の時間などに、自分たちで考え出した多くの活動を熱心に行う。壁新聞を書

いたり、家庭の物をリサイクルしたり、クラスメートを楽しませるために理科の実験をやってみせたりするのである。また、生徒は

そういった係の活動を行っただけでなく、反省の時間ももち、その時間に、みんなで助け合ったかなど、活動について反省する。当番制のように、係の仕事もクラスに貢献するための一般的な方法になっている。生徒たちはクラスメートのクラスへの貢献を振り返っているうちに、「よい生徒」や「いい人」のモデルをつくっているようである。

### 反省

一年生のたいいていのクラスで、生徒たちがその日の目当てを守れたかどうかや一日の自分の行動



について反省する時間がある。一人一人考える時間が与えられるという場合や、みんなで決めた目標を達成できたかどうか挙手する場合など、様々なやり方で反省を行う。

日本の子どもや親は、子どもの教育達成の評価がアメリカ人より低いが、皮肉なことに、実際は、日本の子どものほうが達成度は高い。また、日本の子どもは、アメリカやヨーロッパの子どもよりも自分自身についての満足度が低いことも報告されている。このことは、子どもたちの「反省」という活動経験と結び付いているのではないかと思われる。反省することで、子どもたちは自分の欠点に注意を向けてしまうのかもしれない。こういった自己批判的態度を寡黙さや劣等感と関連づけ、自己批判の適性レベルという興味深い問題提起をした日本の研究者もいる。

しかし一方で「反省」は、自分の行動について

考えたり、他の人の考えや感情をみる機会にもなっている。教師やクラスメートに支えられて、「反省」の時間は、信頼する友達との一日の活動を振り返る楽しいものであるようだ。今まだ私たちは「反省」についてあまり知らないが、日本の教育を理解するうえで重要な点であろう。

### クラス会議

二人の当番が四十五分間、クラスの週の話し合いを運営する様子には驚かされる。当番はクラスの前に出て議事を進行していく。大まかに言う、「今から話し合いを始めます」「今日はAとBを決めます」「初めにAについて話し合います」という具合に進行し、Aについての話し合いがまとまると「次にBについて意見を出し合います」と進める。Bについても話がまとまると、「何か他に決めることはありませんか」「これ

で話し合いは終わります」という流れで終わる。意見が分かれると挙手で決めたりし、そこで教師が口をはさむとか、仲裁するというのではない。何か物事が決定するとそれを当番が確認し、黒板に書く。

### 自主運営

このように子どもたちはクラスの活動やルールを決めるところから関わっている。目先のことだけ考えれば、教師がクラスの活動やルールを一方的に決めたほうが効率的であろう。しかし、話し合いは生徒全員を巻き込むかたちになっており、子どもたち自身の問題を短絡的に教師が解決することは避けられている。

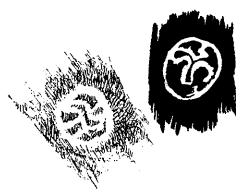
また、国の教育要領が社会的・道徳的発達を重視していることに支えられ、生徒が話し合いに参加し、思いや願いを分かち合い、ルールを守っているかどうかということを、教師は重要な教育

の達成尺度と見なしている。

### 教師の立場

日本の教師は権威的にふるまわない。子どもたちの自主性に教師の関心があるようだ。

いかにして、子どもたちに押し付けずに、ルールや係などのシステムを生み出すかという点で、多くの教師は苦勞している。例えば、ある幼稚園教諭は、子どもたちに新しい係を取り入れさせるために三か月間努力した話がある。それは、教諭が新しい係をつくろうと言うのではなく、子どもたちが、その必要性に気づくようにヒントを出し続けるという努力であった。そして、その教諭は「子どもは自らの活動を通して学ばなければならぬ。それは子どもたちのなから生まれてくる



べきだ」と述べた。

また、日本の教師は、間違った行為に対して罰を与えたり、従いなさいと命令したりすることはせず、質問や説明、話し合いをすることが多い。

ある研究では、子どもは外的圧力や外的操作がないとき、つまり、自らのやる気にしたがっているときに、最もよくルールを内面化するということが示されている。それは、自らのやる気でルールを守っている自分をよい子としてとらえるからではないだろうか。別の研究では、監督されていると、人は、やらなくてはならないからやるという態度になり、やる気を減退させるとか、子どもが楽しんでる活動に対して褒美を与えると、その活動への興味を減退させるということが示されている。それはおそらく、外的な監督や褒美が、子どもの活動の楽しさから注意をそらしてしまうのだろう。つまり、子どもは監督や褒美のない外的

圧力のないところで、責任ある行動をするということになる。これは日本の実践と興味深い一致を示している。

さて、子どもたちは寛大な家庭から自制的な学校へいかに移行していくのかという、最初の問に戻ると、以上のことから、

- ・子どもたちもクラスのルール作りに関わる。
- ・すべての子どもがリーダーシップをとる機会をもつ。
- ・係などの活動を通して日々のクラスの生活に貢献する。
- ・自己反省し、自己評価する。

このようなことが子どもたちの自制的なふるまいに関わっていると思われる。

(お茶の水女子大学大学院)

ある日の育児日記から

(72)

佐藤 和代



最近、圭の友達の家遊びにくると、決まって始まる遊びがあります。部屋を締め切って「はいらないでください」の張り紙をして立てこもる。はて、中何をやっているのやら。「ロックしてから入ってください」なんて大人びたことを書いて日もありました。ロックじゃなくてノックでしよ、カタカナの勉強が足りないな。

小さい頃は、友達がくると、私も一緒に遊んだり、すぐ始まる小さなけんかの仲裁をしたり、それなりにかわわっていました。すぐに「お母さんきて」「お母さん見て」と言われるし。それがい

つの間にか、子どもだけで遊べるようになって、「友達が出てくれた方がお母さんは楽できるわね」と言えるようになりました。そして今度は「お母さんはいないで、見ないで」というわけです。そのうち、家でなんて遊ばなくなるのかしら。

もっとも、ずいぶん成長したものだ、と感慨深い反面、弟の有も閉め出されることがよくあって、また手がかかるのです。有をなだめて、タイミングをみて、仲間に入れてくれるように頼んで：やれやれ、有も友達と勝手に遊んでくれると助かるんだけど。こっちが友達と「お母さんきちやだめ」をするのは何年後でしょうか。



# 幼児の教育 第九十五卷 (平成八年) 総目録

## ◇一号

〔巻頭言〕生活感を育てる保育を

関口はつ江  
津守 真

保育者が老いるとき 佐木みどり

M先生とKちゃんのこと 小島 直美

「こどもテレホン相談」から(1) 小山 幸子

動物行動の研究から(5) 小川 清美

第21回 O M E P 世界大会を終えて

震災後の子どもたち(4)

地震と絵本づくり 箕浦 志保

ある日の育児日記から(6) 佐藤 和代

差し出された十円玉 永野むつみ

中国のむかしばなし 近藤伊津子・編

## ◇二号

子供讃歌

〔巻頭言〕幼児教育の生々 青木 久子

生きがいへの転換 津守 真

震災後の子どもたち(5)

長男と野球と震災 宝満 博子

教育における「音楽」の役割 村山 順吉

トボスにおける発達第六回 保育におけ

る一回性と普遍性 無藤 隆

ある日の育児日記から(6) 佐藤 和代

子どもたちへのまなざし(7) 松井 とし

園長室の窓から(6) 原口 純子

動物園の愉しみ 並木美砂子

『十里霧中』息子たちのイギリス公立校

体験記(3) 豊田 一秀

「先生、きれいなお花があった」 岩上 節子

## ◇三号

子供讃歌

〔巻頭言〕三月によせて 清水 光子

世界の保育者たちの戦い 津守 真

遅れて来たおたまじゃくし伊吹山真帆子

震災後の子どもたち(6)

地震よりこわいもの 森末 哲朗

「こどもテレホン相談」から(2) 小島 直美

お散歩・電車コースの巻 大須賀裕子

ある日の育児日記から(6) 佐藤 和代

動物行動の研究から(6) 小山 幸子

四季の庭・四季の道 子どもと一緒に植

物を見る眼 浅山 英一

ねえ、誰か教えてあげて 永野むつみ

## ◇四号

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(1)

保育における新と真を問う森上 史朗

エレン・ケイ『児童の世紀』を読む 津守 真

震災後の子どもたち(7)

若者が深呼吸できる場 村井 正清

開発途上国での保育による国際協力 前田美知子

ある日の育児日記から(6) 佐藤 和代

保育者が自分の価値観を見つめ直す

ために 田代 和美

共に楽しむということ 永田 陽子

トボスにおける発達第七回

身体性の変容

無藤 隆

保育の窓(1) 遊び

原口 純子

あんよ、いたいの？

並木美砂子

『十里霧中』番外編

豊田 一秀

◇五号

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(2)

好奇心にみちち、とらわれることなく、  
現実から学ことができるように

長畑 正道

エレン・ケイ「児童の世紀」を読む(2)

津守 真

五月の山小屋にて

清水 光子

子ども時代と私

水野 梯一

震災後の子どもたち(8)

親の生活の再建

を一刻も早く

田中 英雄

保育の実践研究について考える

梶田 正子

四季の庭・四季の道 子どもと一緒に

たのしむ春まき草花二種 浅山 英一

「子どもテレホン相談」から(3)小島 直美

選ぶのは、子ども 田中三保子

ある日の育児日記から(6)

佐藤 和代

東欧の子どもたちと幼児教育(1)

入江 礼子

◇六号

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(3)

少子化時代の幼児教育 太田 次郎

「大人の時代」か？ 津守 真

特集〈アレルギーとつきあう〉

小さなハンディがあったからこそ

川口 有理

そんな、がんばらなくていいんだよ

中村 泰子

アトピーとの戦い

村田 和子

みるくせーぎの会

田坂 幸代

アレルギーなんて大したもんじゃない

山田 真

今、思うこと

山下 恵美

トボスにおける発達第八回 子どもものび

オートプとしての園環境 無藤 隆

子どもたちへのまなざし(18) 松井 とし

保育の窓(2) 幼児理解 原口 純子

ある日の育児日記から(6) 佐藤 和代

子どもが嫌がる人形劇

永野むつみ

◇七号

ある日

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(4)

快いことばの体験を豊かに吉村真理子

黄色い自動車 津守 真

震災後の子どもたち(9)

大好き！くるくる滑り台 前澤美津子

「子どもテレホン相談」から(4)小島 直美

『十里霧中』息子たちのイギリス公立校

体験記(4) 豊田 一秀

子ども時代と私(2) 昭和、昭和、昭和の

子どもよほくたちは 津守 房江

声がでない日に思ったこと 伊集院理子

ある日の育児日記から(6) 佐藤 和代

東欧の子どもたちと幼児教育(2)

入江 礼子

子どもと天文学 近藤 雅之

子どもたちへのまなざし(19) 松井 とし

外国の文献から『心情と知性の教育―日

本の就学前と小学校教育に関する考察』

第一章 日本の教育制度 洪川明日香



◇八号

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(5)

保育の中での「疑惑」と「試行」

渡邊 泉

子ども時代の空間体験

津守 真

お茶の水女子大学附属幼稚園長を終えて

島田 淳子

特集〈緑蔭図書館紹介〉

『海・呼吸・古代形象』

吉増 克實

大人歴二十五年、少年少女からのメッ

セージ

友定 啓子

西脇順三郎の詩

彌永 信美

激動の時代を生きた女性たち

牧野カツコ

親子……そして教育

鈴木みゆき

怒れる子どもたち

矢萩 恭子

トボスにおける発達第九回

環境の探索

としての移動

無藤 隆

ある日の育児日記から(68)

佐藤 和代

保育の窓(3) 幼稚園の現状と諸問題

原口 純子

お昼寝中の研修会

永野むつみ

◇九号

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(6)

「センス・オブ・ワンダー」の時代へ

間藤 侑

保育者の世界の一断片

津守 真

子ども時代と私(3)

南 佑子

「子どもテレホン相談」から(5)小島 直美

「育ち」という言葉

竹内 順子

ある日の育児日記から(69)

おかえりのひととき

佐藤 和代

四季の庭・四季の道 花色あそび

上坂元絵里

『十里霧中』息子たちのイギリス公立校

体験記(5)

豊田 一秀

子どもたちへのまなざし(70)

外国の文献から

松井 とし

第二章 幼稚園での経験

浅山 英一

◇十号

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(7)

「夫婦別姓」論争からみた家族像の多

様性と異質性

洪川明日香

佐々木宏子

考えながら歩む

能動性を育てるために

保育文献賞を受賞して(1)

子育て・江戸からの照射

震災後の子どもたち(10)

更地のカボチャ

生活のなかの歌と音色

トボスにおける発達十回

ある日の育児日記から(70)

東欧の子どもたちと幼児教育(3)

援助について

外国の文献から 第三章 小学校での全

人格的アプローチ

保育の窓(4)

ある日

◇十一号

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(8)

「学校」の役割が変わった

保育学文献賞を受賞して(2)

「子育てひろば」としての保育園をめ

ざして

新澤 誠治

子ども時代と私(4)

満州開拓団の引揚者の子 黒岩 卓夫  
ある日の育児日記から(7) 佐藤 和代  
手を使うこと 未来を開く 津守 真  
「子どもテレホン相談」から(6)小島 直美  
震災後の子どもたち(11)

わすれないあなたのことを わすれない  
あひのひのことを 森谷 恭子

『十里霧中』息子たちのイギリス公立校  
体験記(6) 豊田 一秀

朝のこと 高橋 陽子  
外国の文献から 第四章 小さな集団―

子どもたちの活動の拠点 徳田 治子

◇十二号  
ある日

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(9)  
自分の思いをもって、ゆつくり出会う

震災後の子どもたち(12)  
ママと暮らせばいいのに 鹿島 和夫

保育する「私」を見つめる (へいきいき  
しき)を保つために 嶺村 法子

米国の生活四十五年間の変化(1)

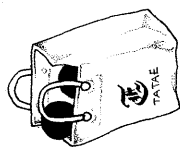
トボスにおける発達第十一回 幼稚園の  
コーナーという場所 無藤 隆  
子どもたちへのまなざし(2) 松井 とし  
保育の窓(5) 教育実習を考える  
原口 純子

子どもの本から  
大きな足の女の子の英雄 皆川美恵子

外国の文献から  
第五章 自律の原点 古賀 松香

ある日の育児日記から(7) 佐藤 和代

第九十五巻総目録



幼児の教育

第九十五巻 第十二号  
(一九九六年十二月号)  
定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成八年十二月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―二―一

発売所 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―六六―三(営業)

☎〇三―五三九五―六六―四(編集)

振替 〇〇―一九〇―二―一九六四〇

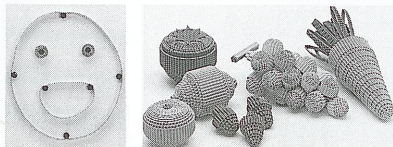
☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

## 手づくり保育シリーズ

なんでも「手づくり」してしまう先生たちに贈る新シリーズ。  
不得手先生でも子どもたちといっしょに楽しみながらつくれるのがチャームポイント。

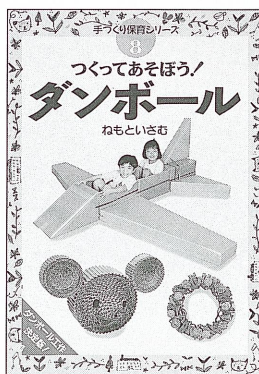
### ⑧ つくってあそぼう! ダンボール

どこにでもあるさまざまなダンボールを使って遊んでみよう。一人で遊べる小さなおもちゃ作りから、仲間できいっしょに遊べる乗り物や家など大型の製作までを紹介。切り方や貼り方などダンボール製作の基本書。



ねもと いさむ・著

B 5 判・96頁・定価2,200円 (本体2,136円)



## ワイド判保育資料①

### うちわシアター ワン・ツー・スリー

身近にあるうちわを使って子どもたちにお話を演じてみよう。子どもたちがよく知っている物語や新しく創作されたお話などで遊べる題材を取り上げている。大判で原寸のカラー人形がそのまま使える。



阿部 恵・著

B 4 判・96頁・定価2,500円 (本体2,427円)



キンダーブックの  
**フレール館**

# 創業90年・キンダーブック創刊70年記念出版

弊社は明治40年、幼児教育・保育への寄与を目指して東京・飯田橋の地に誕生しました。以来、皆様のご支援をいただきながら来年創業90年を、また、昭和2年誕生の「キンダーブック」は創刊70年を迎えることとなりました。

この創業90年・創刊70年を記念し、21世紀を視野に入れた情報源・知識源『現代保育用語辞典』を企画いたしました。新しい時代に対応する常備書として、皆様のお手もとにご用意いただければ幸いです。

保育用語約2,000語・人物約190名を50音順に配列し、解説。

## 現代 保育用語辞典

付録：外国の保育教育40カ国

保育を語る時に欠かすことのできない基本的な用語、新しい保育観・子ども観から出てくる言葉などを通して、保育の真髄とこれからのあるべき姿を分かりやすく示す辞典。みだし語は英訳付きで、今の保育に直結する語釈をポイントとし、引きやすく、意味がすぐ確認できる辞典。

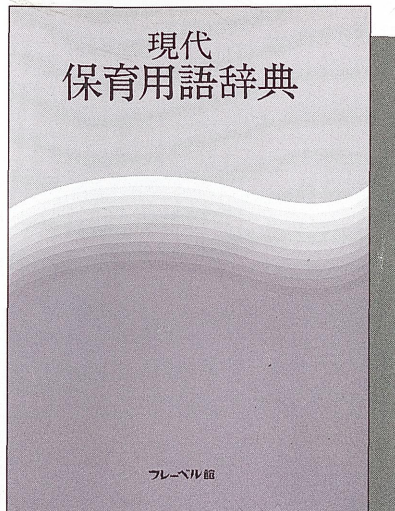
### 編集委員

岡田正章・千羽喜代子・網野武博  
上田礼子・大戸美也子・大場幸夫  
小林美実・中村悦子・萩原元昭

### 執筆者

保育及び隣接分野の最高権威者330名が参画。

A5判・592頁・定価8,000円（本体7,767円）



創業90年記念  
特別定価  
**7,500円**  
(税込)

平成30年1月31日  
までにお申し込みの方

キンダーブックの  
**フレーベル館**